

# 神代直人の捕縛

## —大村益次郎襲撃事件顛末—

皆さんは神代直人という人物を知っていますか？

神代直人とは、大村益次郎を襲撃し、結果として死に追いやった犯人グループの首謀者とされる人物です。また、伊藤博文の回顧談には、英国船での和議交渉から帰還した高杉晋作と伊藤博文を襲撃しようとしたとも伝えられ、司馬遼太郎『花神』などの小説では冷酷な暗殺者として描かれています。

神代直人は、大村益次郎襲撃後、明治2年(1869)10月に豊後国姫島から山口に帰着した際、官吏に見つかり、自ら割腹したとされてきました。

今回は、この人物の捕縛の謎にせまりたいと思います。

明治2年9月4日、大村益次郎は明治新政府に不満を持つ8人の凶徒により京都の旅宿で襲撃を受けました。益次郎は刀傷を受けたものの、一命はとりとめました。当初は命に別状はないと思われましたが、その後、傷が悪化し、蘭医ボードウインの治療を受けるなど手を尽くしたものの、11月5日に亡くなりました。

益次郎を襲撃した者達は、山口藩士2名を含め、9月中旬に次々と捕まえられましたが、首謀者とみなされた神代直人は、なかなか捕まりませんでした。

国立公文書館所蔵の「公文録」という政府の記録によると、山口藩から、10月上旬に周防国小郡において神代直人を捕縛しようとしたところ、「已ニ屠腹致掛居、存命ノ程無覚束」（既に割腹しかけており、存命が覚束ない）ため斬首したと、11月に入って報告されていることがわかります。

後世、大村益次郎について記した本は、これらの記述に基づき記されています。しかし、当館所蔵の史料を見ていくと新たな事実が浮かび上がってきます。



「諸記録綴込」と呼ばれる一群の史料は、戦前の毛利家編輯所において嘉永6年(1853)～明治4年(1871)の廃藩に至るまでの編年史料をまとめるため、様々な記録を解体し、年月日順に編綴し直したものです。この記録を調べていくと、山口藩では10月10日には、神代直人を捕縛していたことがわかります。

さらにその他の史料から、山口藩は捕縛した神代直人を山口へと送り、10月12日に揚り屋(未決囚を拘置する建物)に収監し、10月20日に知行没収・斬首を申し渡しています(No.1)。

つまり、神代直人は捕らえられた上で裁かれ、処刑されているにもかかわらず、山口藩では、この事実を伏せ、捕縛時に割腹したため止むを得ず斬首したというストーリーを作って政府へ届け出ているのです。



No.1 罰事奉伺録

No.3 天朝御沙汰一件

No.4 朝廷江御願出控

ではなぜ山口藩は自ら神代直人を処刑し、事実とは異なる報告をしたのでしょうか？

山口藩では11月2日、政府に対し大村益次郎襲撃の罪で既に捕縛されていた山口藩士2名の引渡しを求めています。その理由を、藩内において彼らの罪を周知し斬首することで、「一統之懲」にしたいからだと述べています。引渡しは却下されましたが、襲撃犯と同様の攘夷論者が依然として山口藩内に多数存在しており、それらに対して強硬な姿勢で対応しようとする藩の意向がうかがえます。また、兵部大輔という政府重職にあった大村益次郎の襲撃犯を、自藩から出してしまったという引け目が、自らの手による刑の執行にこだわった理由かもしれません。

山口藩において神代直人の斬首が決定・実施されたことは、神代直人が京都へ連行されるはずと考えていた関係者にとって寝耳に水でした。既に藩の京都屋敷では、捕縛の報せを政府へ届け出たこともあり、その後の連絡に窮することになりました。

結局、山口藩では刑の執行を公にせず、藩士杉孫七郎を東京・京都へ派遣し、捕縛時に自死したとのストーリーを仕立てて決着させるよう取り計らっています(No.2)。

杉孫七郎の周旋の結果、11月に入ると山口藩公用人宍道直記の名で太政官に対し、神代直人は捕縛時に割腹したため余儀なく斬首した旨の報告がなされました。その後、太政官の要請により、山口藩から神代直人の口書が提出されますが、この口書は本来の口書(No.3)を改変した偽の口書(No.4)であり、これが国の記録に書き留められたのです。

公的な記録といえども事実と異なる場合があることを、この事例は教えてくれます。

#### [展示資料]

- No.1 罰事奉伺録 (毛利家文庫9諸省295 (2の2))
- No.2 諸記録綴込 明治2年11月15～30日 (毛利家文庫32部寄17 (18の17))
- No.3 天朝御沙汰一件 (毛利家文庫1雲上28 (5の2))
- No.4 朝廷江御願出控 三 (毛利家文庫1雲上43 (6の3))

神代直人の捕縛

—大村益次郎襲撃事件顛末—